

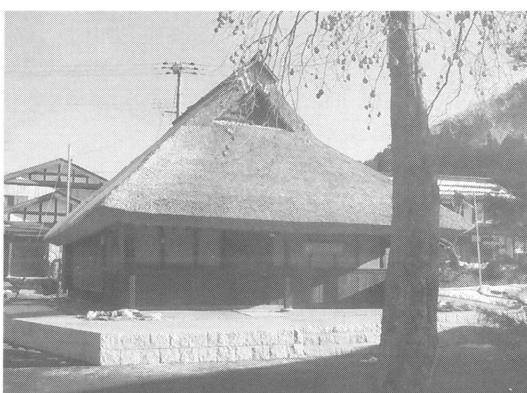
奥伊吹ふるさと伝承館が3月24日オープン

[伊吹町]

坂田郡の最北の集落・伊吹町甲津原は、姉川最上流部の山間の村です。ここに今春、江戸時代の民家を復原改修した「奥伊吹ふるさと伝承館」が開館します。

甲津原の標高は約540m、北と東には1,000m級の山々がそびえ立つ、県内屈指の豪雪地帯です。集落からは美濃へ通じる三本の峠道があり、むかしは物資の中継地点として栄えました。また、豊かな民俗文化が伝承され、とくに芸能文化では、本願寺顕如・教如上人を慰めるために踊られたという「顕教踊」や室町時代の能面が大切に保管されています。

この民家は、竹中家の住宅でしたが、平成12年度に町に寄附されました。古文書等の記録はありませんが、天保7年(1836)4月、村のほとんどの家屋96戸を焼失した火災で焼け残ったと伝えられていることから、この年より以前に建てられたものと思われます。甲津原の民家の特徴は、囲炉裏をきっ



たダイドコの床板が縦張りであること。一説には、芸能が盛んな甲津原で、どこの家でも能舞台となるよう、このような造作がおこなわれたそうです。

もとの間取りが復元され、ウマヤとネマは展示スペース。ダイドコは体験したり、食事をとる場所に利用される予定です。区民で準備委員会が作られ、全戸に資料の提供が呼びかけられると、山間部の生活道具がたくさん集まりました。これだけでもひとつの民俗文化財です。

体験メニュー作りや協力者の募集・甲津原を紹介するパ

ネル作りも急ピッチで進んでいます。

山間ゆえに残されてきた貴重な民俗文化がよみがえり、先人の知恵を次代に伝えるために活用されます。関西の奥座敷・甲津原へお越しください。(高橋順之)

* 詳細問い合わせは

伊吹町農村振興課まで
TEL 0749-58-1121(代)

情報 BOX

- ◆伊吹山文化資料館では下記の企画展を開催中です。
第30回企画展『オホーツク海を駆けめぐらす』
※大正5年単身北海道に渡り、企業家・政治家として網走地方の振興に尽力された伊吹町春照出身の林好次氏を紹介します。
3月3日まで(月・火曜日休館)
◆伊吹町教育委員会では、下記の文化財報告書を刊行しました。
『上平寺遺跡・寺林遺跡』(第14集)
※北近江守護京極氏の館に伴う城下町跡の調査等
◎問い合わせ先
伊吹山文化資料館 (0749)58-0252
◆近江町で新設されたHPアドレスを紹介します。
www.town.omi.shiga.jp
※ここでは近江町の発掘調査概報が読みます。また、写真や図面を自由にダウンロードすることもできます。ご利用ください。
◆米原町教育委員会では、下記の文化財報告書を刊行しました。
『米原町指定文化財 川口家住宅(旧醒井宿問屋場)修理工事報告書』
『登録文化財 旧醒井郵便局局舎修理工事報告書』
◎問い合わせ先
米原町教育委員会 (0749)52-6632

◆◆編集後記◆◆

お気づきの方もあろうかと思いますが、今回の『佐加太』は「女性と文化財」という特集テーマで構成しました■各町担当者には、女性と文化財行政または女性にまつわる文化財を紹介してほしいと頼みました■この際、女性と文化財担当者…は、ご遠慮願ったことはもちろんです■期待通り各町から、それぞれ視点の違う情報を提供いただきました■打ち合わせもしていないのに、さすが息のあった坂田郡と編集者は感心しています■実は、われわれが所属する坂田郡社会教育研究会の今年度の共通研究テーマは「女性教育」です■本号は、文化財部会がこの課題に迫るための資料もあります■後日、さらに掘り下げた報告がおこなわれるそうです■関心のある方は近江町はにわ館まで

(の)

坂田郡文化財ニュース

佐 加 太 第15号
発 行 平成14年1月15日
編 集 坂田郡社会教育研究会文化財部会
事務局 〒521-0314 滋賀県坂田郡伊吹町春照37
伊吹町教育委員会生涯学習課
TEL. 0749(58)1121
印 刷 立木印刷



佐加太とは、「和名抄」東急本の坂田郡の訓を引用しました。

第15号

特集・女性と文化財

2002年1月15日

滋賀県坂田郡社会教育研究会
文化財部会

知恵の泉 -伊吹山文化資料館のおばさんたち-

[伊吹町]

伊吹山文化資料館は、平成10年に町立春照小学校春照分校を改修して開館しました。メインテーマは「伊吹山と山麓の自然と文化」で、伊吹山の自然資料や町内の考古資料・民俗資料などで構成した常設展示と、地域に密着した企画展示を開催しています。また、より深く地域を学ぶための「文化財教室」や「体験教室」などを毎月行っています。これらの活動は、開館準備から指導いただいている「資料館友の会」(会員24名)に支えられています。活動しているところが大きく、経験豊富な町内の高齢者を中心的に、資料館の維持管理、体験教室や社会科・理科・総合学習等の授業の講師など積極的に活動していただいている

います。

さて、小学3年生は社会科で「むかしの暮らし」を学びます。昭和30年代までの日常生活を学ぶのですが、友の会のおばさんたちの出番です。ここでは石臼のソバ挽きを紹介しましょう。

伊吹町は日本のソバ発祥地であり、また、石臼の産地でもありました。この、地域特産の素材を利用して、展示している石臼を実際に使って、おばちゃんたちを講師



▲石臼をひく

に石臼による「ソバがき」作りを体験しました。まわす方向や速さ、出てきた粉の処理など初步的な使い方を学び、ソバ粉を作り熱湯でソバがきにする。これに石臼でひいたきな粉や特産の伊吹大根を薬味にして試食するというものです。子どもたちは、交代で石臼をまわしながらおばさんたちの子どもの頃の暮らしぶりを聞き実感します。

ひとむかし前の食生活や衣服、お手玉などの遊びから田んぼ仕事まで、資料館の活動の中でおばさんたちの力に頼るところは多く、年末に友の会に振舞ってくれる芋汁や惣菜は、みんなの楽しみのひとつです。

総合的な学習の時間の取り組みの中で、子どもたちの学習の場が学校から地域に広がってきました。資料館では、地域の人材に協力していただくことで、学校教育に携わる方と地域の人たちや施設の関係者が子どもの教育について互いに理解しあい、それぞれの機能をフルに發揮して、共に地域の子どもの育成に関わっているという認識が生まれつつあります。(高橋順之)



▲昔の衣服のおはなし

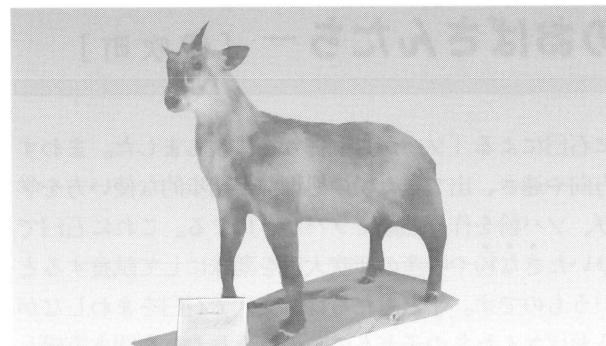
坂田郡の天然記念物③

【国指定特別天然記念物】ニホンカモシカ

ニホンカモシカは、日本列島の本州・九州・四国にしか分布していない、世界でも珍しい動物であるため国の特別天然記念物として手厚く保護されています。

昔はニホンカモシカの肉は“山の幸”として盛んに食べられ、山村では重要な食料となっていました。ところが近代以降、大規模開発が山間部にも及んできたため生息範囲が限られ、年ごとに数が減ってきていました。

昭和9年5月1日に天然記念物に、さらに昭和30年



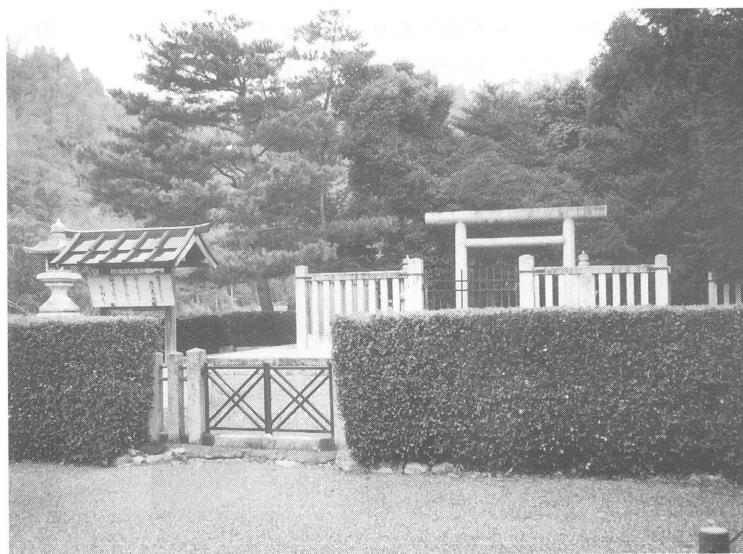
▲ニホンカモシカ(平成12年 伊吹町内で死亡)

おきながひろひめ 伝息長広姫陵（村居田古墳）

伝息長広姫陵は、長浜市と境をなす山東町の北部、村居田の光運寺に隣接しています。

広姫の墓がその故郷である坂田郡に造られたことは「延喜式」諸陵寮に記されていますが、この古墳が広姫の陵墓となった発端は、江戸時代の元禄9年(1696)に光運寺本堂改築のために、隣接する小丘陵を開墾したところ、石棺などが現われ、中から宝冠や太刀などが発見されました。そこで、後年の明治5年(1872)に教務省の調査により広姫陵と定められ、同28年に現在のような外観が整えられました。

しかし、この御陵には“本当に広姫の墓なのか”という疑問が付きまとっています。それは、明治5年の調査の際に描かれた石棺の蓋の模写図と、十数年前の光運寺本堂石垣改築により見つかったとされる埴輪片などから、この古墳は5世紀末頃のものではないかと考えられており、6世紀後半の575年に没した広姫の墓とするには年代差があり過ぎるというものです。



[山東町]

地元では、“息長御陵”として親しまれているこの古墳。今後様々な研究の成果により大きな波紋を呼ぶことでしょう。

(桂田峰男)

人塚山古墳の発掘調査

横山丘陵の南端から天野川流域にかけて分布の広がる息長古墳群は、3世紀前半から6世紀後半にかけて築造された比較的コンパクトな古墳群です。近年の調査では、丘陵裾部に展開される集落遺構とともに、その実像が少しづつ明らかにされています。

2001年8月、この古墳群の中で「最後の前方後円墳」と考えられていた人塚山古墳（6世紀中頃）の発掘調査を、近江町教育委員会と大手前大学史学研究所（兵庫県西宮市）が合同で実施しました。

古墳のある地元の近江町顔戸区では、現在藪地となっている同古墳を整備し、住民が歴史を理解しながら憩える場として「人塚山古墳公園」を作ろうと考えています。住民参加のまちづくり事業の中で生まれたプランを実現させるために、同古墳の墳形を測量しなおし、調査区を設定して発掘調査を実施しました。

現在、男女共学となっている同大学は、数年前まで女子大学であったため、調査の主力メンバーの多くが女性で構成されています。これまで男性の視点に偏りがちで

あった遺跡の発掘調査ですが、女性の視点が多く加わるようになりました。

今後、4世紀の前方後円墳「定納1号墳」、5世紀の大型円墳「甲塚1号墳」など息長古墳群の中核古墳群と同じ組織で展開していくますが、「社会的文化的性差（ジェンダー）」を超えた考古学の視点が生まれ、地域史が復原されていくことを楽しみにしています。

(宮崎幹也)



▲人塚山古墳の発掘調査

なべかんむりまつ 筑摩の鍋冠祭り

近江なる筑摩のまつりとくせなし

つれなき人の鍋のかず見む

『伊勢物語』に詠まれた筑摩の祭りは、平安貴族にも広く知られた祭りで、別名「鍋冠祭り」とも呼ばれ、毎年5月3日に筑摩神社の春の祭礼として行われています。

伝えるところ、祭りの渡御に奉仕する女性は袴を重ねた男性の数だけ鍋を冠らなければなりませんでした。もし、その数をごまかすと、神罰が下り全身が薄れ冠っている鍋が破れるといわれていました。ある年、数をごまかした女性の鍋が破れ、村人の笑いものとなったので、池に身を投げてしまいました。

これを知った彦根藩主の井伊侯は成人女性の渡御を禁じ、以後7~8才の少女に鍋を冠させて渡御に奉仕させるようになったとのことです。

しかし、こうした俗説は鍋冠祭りの起源があまりにも古く、近世の儒教精神世界のなかで誤って流布されたものようです。

筑摩の地には平安時代、宮内省大膳職の御厨が設置された場所です。宮中の食事を掌る御厨の神に頭上奉仕し

た姿こそが祭りの原型だったと考えられます。また、『堤中納穂物語』には、筑摩で近江鍋という土鍋が生産されていたことが記されており、あるいはこうした特産品を頭上に頂くことに起源が求められるのかも知れません。

いずれにせよ、今では緑の狩衣に緋の袴をつけた少女の雅やかな姿は湖北に春の訪れを告げてくれます。



▲鍋冠祭り